

お金はこわいものか

愛知県・一宮市立尾西第二中学校 3年 飛田 野どか

『たのきゅう』という落語の一節で、老人に化けたうわばみが、旅芸人のたのきゅうに嫌いなものを聞く場面。

「俺は、たばこのヤニと柿^{かき}シブが大嫌いだ。お前が、こわくて嫌いなものは何だ。」

「わたくしは、お金がこわくて嫌いです。」

お金がこわいとはどういうことかと思ったが、

「金に目がくらみ、人間同士がいがみ合い、果ては殺し合うのをみると……」

と続いたのきゅうの言葉に、なるほど深いなど、妙に感心してしまった。

残念ながら、古今東西、お金が絡んだ事件は後を絶たない。事件を見聞きするたびに、つくづく人間にとってお金って一体何だろうと思ってしまう。お金ほど表と裏、功罪合わせ持つものはない。

お金を介して物品やサービスをやり取りしている今日、お金がなくては困るし、たくさんあるに越したことはないというのも事実だ。ところが、分相応以上にお金を手に入れたがったり、お金に執着したりする人が多いのはどうしてだろう。お金をめぐって人間と人間が争い、挙げ句の果ては他人の命まで奪い、金品を我が物にしようというのはどう考えても許されることではない。直接命を奪わないまでも、昨今の振り込め詐欺などは、他人の弱みに付け込んで、初めから金銭をだまし取ろうという悪巧みだ。全く強い憤りを感じる。

もともとお金は、一定の労働の対価であるべきものはずなのに、こうした事件で見えてくるお金には、労働や勤労の影がひとかけらも感じられない。とても悲しいことだ。

しかし、こんな悲しいお金の話ばかりではない。「浄財」という一つの言葉がある。自分に対してだけでなく、気持ちあって、人のために進んでお金を使おうという人がいる。私財をなげうって、福祉施設を建てたり、貧困にあえぐ国々に援助をしている人がいる。

何も大きな寄付だけではない。例えば、国内外で大きな自然災害が起きると、被災地に向けて寄付を募る箱が町のどこかしこに設置される。多くの人たちが、それぞれの気持ちを箱の中に託していく。私もコンビニで〇〇地震、義援金箱などを見かけたときは、ほんのおつりほどのお金だけど、なるべく入れるようにしている。自分に置き換えたらとても他人事ひとごととは思えないからだ。こうして一人一人の気持ちが集まって、まとまったお金が被害に遭われた方々に送られると思うと、こういうお金って何だかあったかいと感じる。

一方で、あまりいい表現ではないかもしれないが、「捨て金」という言葉がある。ギャンブルで使いこんでしまったお金や、無駄な投資などがこれに当てはまるのであろうか。でもこれとは全く反対の表現に、お金を活かすとか、活きたお金にするとかがある。いい意味での投資信託とか自分への投資、ほかの人に夢を託すためにお金を使うときもある。

私の祖母は私が生まれてすぐ、私の名義で学資保険に加入したそう。祖母は、ミシン縫製の内職をして得た賃金から毎月毎月掛け金を払ってくれている。私自身は、このことを今まで知らなかったのだが、つい最近、祖母から直接話を聞いて初めて知った。

「のどちゃんが、ばあちゃんちに遊びに来てくれるたんびにおこづかいを少しずつあげてもいいけどね。それって、のどちゃんはどういう気持ちかもしれんけど、お金はその時限りのものになっちゃうでしょ。のどちゃん、お金を積み立てるってわかる？ ばあちゃんはね、自分が働けるうち毎月少しずつ掛け金を払っていくよ。健康で暮らしておればこそ、ああ、この月も無事払えたかと思うとうれしいよ。それで、おまけにばあちゃんが貯めたこのお金を将来、のどちゃんに役立ててもらえるのなら、こんな楽しみなことはないよ。」

私は、この話を聞いて、一生懸命ミシンを掛けている祖母の姿が思い出され、心がじんとしてきた。最近はずっとたまにしか会えないが、こんなに私のことを思ってくれているのかとうれしくなった。お金がもらえることだけにうれしさを感じているのではない。祖母が私に夢を託してくれていることがうれしいのだ。私は自分が今、できることは精一杯努力しようと誓った。それが祖母の気持ちに報いることになると思えるからだ。

親だから、家族だから、血がつながっているから、私にお金を使ってくれる

のは当然と思ってしまうと、互いの心に溝ができてしまい、感謝する気持ちが生まれてこない。私に託してくれているのだと考えれば、自然にありがとうという言葉が出てくると思う。

お金の使い方、価値観は人それぞれだが、お金を争いのもとにするのか、活きたものにするのか結局は、それを使う人間が決めることなのだ。私はこれからも、心が通った人間として、お金と付き合っていきたい。お金は決して怖いものではないと私は思いたい。

